

金季光晴全集



第一卷



金子光晴全集



第一卷

金子光晴全集 第一卷 著者金子光晴 装幀者司修 発行者高
梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央公
論社 電話(五六一)五九二一 振替東京二一三四 ©一九七六

昭和五十一年四月十日印刷
昭和五十一年四月二十日発行



詩

I

目次

香
爐

5

赤土の家

39

こがね蟲

129

大腐爛頌

231

水の流浪

313

鱻沈む

395

路傍の愛人

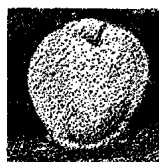
417

老薔薇園

459

後 記

香
爐



香爐	茶	旅	薊	竹	苔	石	庭	秋	屍	柩	磧	フラスコ	花	花
目次				林				の					瓣	
								日						

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	7
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---

ガラスに咲いた創の花	唄	懈	街	洪水	干	唄	泥	潮	さくら	行	跋
	怠				潟			來	吹	路	
								て	雪		

37	33	32	30	28	27	27	26	25	23	20	20
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

茶

亡びゆくもののあかるさに
ほのぼのと茶をくみそめし
めさめや。

茶をくむひびきひびきおち
こころはさとくひびきにうたれ
ひびきにうたれくるひそめしや。

旅

錫にみどりの茶をくめや
錫は秋日のさめやすく

筆嚙切りつつ旅にいづ。

薊

ひと葉はひと葉にひびきいり
ひびきいり、ひびきやまずも
ながるるそら

ひびきいるひと葉はふれて
たちまちに、とどろきしづむ
銀薊。

竹 林

ひしひしと凍る夜の竹林

ひしひしと縛られて喘ぐ

ひよわな

ひよわなおそろしい喘。

おおまことに

ひえびえたる總身。

深夜は、遠く竹林に

冷たい鉦を叩き、たたき

煙草の火は一氣に

めさめてゐる。

苔

ほのぼのと

いちめんの苔があかるくなり

火のやうにあかるくなり

苔むす

苔むす苔の底から

たたいてくる狂氣の鉦かねの音

ああ。そこに私の屍を

血みどろな苔むすしたにうつめてくれ。

あかるい脛、そのままに埋めてくれ。

石

美濃路の旅より二首

磧にでてはあてもなく

はるかのかたに

石をなげ

石をなげ

石をひろへば

かなしかり。

磧の小石手にとれば

わが肩におちくる ひびきあり。

磧に小石多ければ

わが肩もひびきわれよと

たちつくす。

ひびきともよぶ

そのねいろ。

いんいんと

いんいんと

磧をおして

はてしなく。

つききたり

まつはりきたり

はなれざりけり。

庭

さにづらふ

秋海棠の水くきや

みだるる萩に

うつもれて、

架けよ

掛軸。

焚けよ。

香爐。

つゆはそよぎに

銀とちれ。

秋 の 日

あはれまた

つれなき秋の日さしなれば

この胸のかなしみつれて

つめたさの

つれなきたたみ。

あはれこの

指さきのふれがたきにも

いのちはかなく

ちちろの足ははなれたり。

屍

はや、君が

屍となりしほとりの

明るさ。

その指先の